

清水 清水と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。今日のタイトルなんですけど、善通寺と本山寺の五重塔というお話なんですけれども、お話はこの両寺の五重塔については最後の30分ということで、それまでに塔の歴史を少し各時代を通じて、あるいは中国、朝鮮半島の例も振り返りながら、まずはご理解いただいたうえで、最後に本山寺、善通寺の話をさせていただこうというふうに思っております。よろしくお願ひいたします。

(間)

清水 これはサーンチーの仏教遺跡ということでユネスコの世界遺産にもなっておりますけれども、これはインドで最初の統一国家ができたときに、アショーカ王という方が仏陀の亡くなられて100年ほど経たのちのことなんですけれども、アショーカ王が全土に、一説に8万5000のストゥーパを作ったというふうに言われています。そのうちの八つがこのサーンチーというところに作られて、今、三つが現存してるという状況でございます。

(間)

清水 もともと土壇のようなものだったんですけれども、それが紀元前の3世紀ぐらいに各地作られました。それが次の王朝になって以降なんですけれども、数百年後ぐらいに現在のような外装が施されています。レンガで周りを囲って、さらに漆喰(しっくい)で塗り固めて、白くして、それから周囲はこの手すりのようなものとか、あるいは門のようなものが作られて、さらにその頂上にこういったもの、これは一種、傘(?)のつもりなんです。そういったものが最初に作られまして、それがストゥーパと、卒塔婆です、日本語で言うと。卒塔婆として建てられて、ここに釈迦の骨が分骨されてるというようなことになります。これ、大きさですけども、直径が約30メートル強、高さがその半分ぐらいというふうに思ってください。今、日本の五重塔の大きさ、高さというのは、大まかに言うと、3通りに分けられます。小規模なものと15~16メートル。ちょうどこれと同じぐらいの高さです。それから最も数多く建てられた通常の五重塔、30メートル級だと、この倍の高さ。今、現存する中で高い塔としては東寺の五重塔、それから次いで善通寺ですけども、この二つの塔は、この高さの3倍ぐらいだというふうに思ってください。何メートルと言うと、なかなかぴんとこないかもしれませんが、ビルの1階部分の高さって3メートルなんです。そうすると30メートル級の塔だと10階建てのビルになる。大体そういうイメージで受け取っていただければというふうに思います。ちなみにここはインドでは仏教が忘れ去られ、ヒンドゥー教、ほかの宗教が中心になってきますけども、19世紀まで密林に覆われている。これは植民地統治時代、イギリス隊が密林の中で発見していくわけです。なので、***で覆われたから、ほとんど手つかずの状態が残ってきたという貴重な遺跡ということになります。この頂部のこの部分、傘の部分、これがこんにち、今、日本で建てられている塔の一番上部、相輪の部分、金属でできてる部分です。相輪の部分のこれが元の姿と伝えられています。なかなか証明はできないんですけど、そうではないかということでございます。今度は日本の最古の塔について見てみたいと思いますけれども、これは昭和30年代に入りまして、飛鳥寺、***発掘調査です。これが飛鳥寺の現存するお寺です。それが大体このコウド(講堂?)のあとにその飛鳥寺が建て

いて、仏様はここに座ったままの状態でお堂が建て替えられて、こんにちに伝わってきてという状態です。その本堂の前の発掘の結果、中央に塔があって周囲に本堂と呼んでますけども、そういう建物が三つ囲むように建ってということで、塔を中心にして、つまり釈迦の遺骨を祀るという性格を持っている塔を中心にして、お堂が建てられていたというようなことがわかるわけです。記録のうえでは百濟からの技術者を招いて作ったということ。それから、刹柱層(?)と書いてますが、刹柱というのは、塔の心柱、一番真ん中に立っている下から上まで相輪のシンボルのようなところで上まで伸びてるものを刹柱と呼びますが、その礎、一番下を支える礎石ですね。その中に仏舎利を安置をした。翌日(?)それを建てたということが書かれています。その様子、これは塔の基壇という部分ですけども、地中深くに、心礎というものを据えてる。ここに舎利容器を入れてたんです。そこに心柱を立てて、周りを土でまた埋め戻してる。通常の柱はこのあたりに立つということになります。ちなみに、これは鎌倉時代、焼けたのちに、再びこの舎利を、もともとここにあったわけですが、鎌倉時代にもっと浅い位置ですね。このあたりに埋めていたということがわかっています。これは、山田寺というお寺、これが塔の跡で、ここに心礎が見えています。これはあとで塔の焼け落ちたのちに舎利容器を取り出したんでしょうか。掘り出したときの穴を掘ってるということです。これ、山田石川麻呂、この人はいわゆる蘇我一族の中でも対立をして入鹿を暗殺した側、天智天皇側に組みした人なんですけども、天智天皇のもとで右大臣になるわけですが、密告をされてどうも謀反の疑いがあるということで、天智天皇というかまだ天皇になる以前、中大兄皇子から軍勢を差し向けられて、この金堂の前あたりで一族もろとも自害をしたというようなお寺です。古代の寺の中ではこういう建立の経緯等がよくわかっているお寺です。今まで、塔の上部構造というのはまだわからないわけですけども、上部構造がわかるのが、この法隆寺の五重塔ということになります。7世紀の末です。建築年代についてはまだはっきりしないところも多いわけですけども、古い塔の特色としてはこういう、例えば軒先の線、あるいはこういう壁面の線でもいいんですけども、上部に行くほど、だんだん通減をして、小さくなっていきます。この通減の仕方が大きいものは、古い塔ということになります。何のために塔を作るのかっていうことと絡むんですけども、とにかくより高い塔を目指していく中で、だんだん上に行っても通減しないで造っていかうとしていくわけです。だから高さを求めるのと同じ考え方なんですけども、上、行っても、あんまり平面が小さくならないような塔にだんだんしていこうというふうに考えるわけです。それから古い塔の場合はこの相輪の部分が下の部分、塔身といいますけども、ここに比べてこの部分が大きいのが古い塔の特徴ということになります。中の構造はどうなったかということですけども、心礎があって、そこに心柱を立てる。法隆寺の場合はのちに根元が腐ってしまって、ここに借り物の新しい石を据えて、下は切断してというようなことで、もたせているわけですけども。また詳しくはのちほど申し上げたいと思いますが、基本的に塔の構造は心柱を立てて、初重の部分ありますけど、上はというと、2階3階とあるわけではなくて、これ全体がホヤグラ(?)みたいなものです。骨組みが複雑に絡まっているというだけの状態です。それからどうやって上に重ねていくかということ、中の柱はここに小さい柱見えてますけども、外側の柱、ここに斜めの垂木という部材があります。これは屋根面を構成する細

い材が密に並んでいる。その上に盤を置いて、そこに柱を立てる。なので、こういう斜めの部材の上に、こういう材を立てるといふ何となく今の感覚からすると、フシン(?)な建て方です。それを繰り返していくというようなことになります。それから、平面で見ますと、飛鳥寺の場合は先ほども申しましたように、中央に塔があって、周りに金堂が囲む。それに続く同時代からあったと思いますが、こういう塔を正面にして、金堂がその後ろに一つ。この段階でも、この全体で一番何が重要かという、まだ塔のほうが優位性があるというような状況から、だんだん塔が脇によって塔と金堂が向かい合う。あるいは、ここにも金堂がある。このあたりで釈迦の骨、遺骨、仏舎利を信仰するのと、それから仏様を信仰するというのがだんだん比重が仏様のほうに移っていくということになります。だんだんさらに進むと、ここでは塔が二つあって、それから例えば東大寺、さらにのち、奈良時代に入りますと、塔はこの一角からさらに外へ出て左右に塔だけの区画ができるというようなことになります。そうすると塔というのとは何かという、塔自身が信仰の対象というよりも、むしろ伽藍の全体の威容を示す。あるいは遠くからでも、塔がお寺のシンボルとして見えるということで、そういう仏教を広く世の中に広めていこうというときの象徴的な役割を果たすというようなことになっていきます。こういう変化が果たして日本独自の展開なのかというところが実はまだよくわかっていないところなわけですが、次に朝鮮半島の例を見ていきたいと思います。高句麗、百濟、新羅という三国時代なんですけれども、まず高句麗、これは大体5世紀ぐらいから今の北朝鮮の首都、平壤を首都にしていきますけれども、その平壤近郊で清岩里廢寺というものがみつかっています。ここでも中央に塔と思われる八角のものがあって、こちらにも、ここにあります。それから、この定陵寺、これは皆さん、韓国の歴史ドラマ好きな方は、チュモン(朱蒙)って聞いたことございますかね。高句麗を作った始祖として一番有名な方なんです、平壤にその首都を移したときに、チュモンのお墓を平壤に移すわけです。そのそばに作られたチュモンのあれを、何と言いましょか。そのためのお寺ということになります。それから、百濟、百濟では木塔と石塔が混在をしていたことが知られています。ジョウレンジ(?)、これは石塔です。小さな、ここに塔。その後ろに金堂がある。それから弥勒寺、ここに木造の塔があって金堂がある。という、このセットが三つ並んでいて、東西の塔は石塔ということになります。それを百濟の弥勒寺ですけども、この真ん中に木製の塔があってここに石塔がある。現存すると言いましょか、今、あるこれは復元なんですけども、こちらの塔が残っています。ちょうど私、現地行った時分、修理中でして上はおおかた解体されて、下は、これ、1階の初重の部分の心柱と言います。この心柱の下から、舎利の納めたつぼが発見されています。ここがようやく今年の6月、もう2001年から解体修理が行われてたわけですけども、ようやく今年6月に竣工したという状態です。崩れ落ちた状態のまま、ほか復元してないわけですけども、こちら、修理前、これは日本が統治していた時代、朝鮮総督府の文化財行政の中で、こういうコンクリートで固めたわけ、応急処置として。それを今回、全部撤去して、上から解体をして、地中の調査までいったというようなものです。それにしても、石造なんですけども、こういう柱型、あるいは軒先を伸ばすというようなところからは、何かもともと木造をモデルとして作られたのではないかということが考えられます。これは統一新羅時代、7世紀後半の例ですけども、ここでは、

こういう東西に両塔を配するというようなものが出てきています。7世紀中頃になると、コウ(?) 7間と非常に広い平面の広い塔跡が見つかっておりまして、これが新羅の最大の護国のための寺。日本で言うと奈良時代の東大寺だと思ってください。そういう性格のお寺です。これが6世紀中頃にお寺が造られていて。6世紀じゃない、7世紀です。これはキュウソウ(?) の木塔であったと言われていました。これ、イメージ図ですけど。これも、今、テレビで毎日やってる『善徳女王』とかソンドク女王って言いますが、新羅の女王様ですけども、その人が唐から帰ってきた僧侶のすすめによって、これ百済の工人を呼んで造ったと言われていました。つまり、同じような時代に日本にも百済から工人がやってきているわけですけども、当時、百済が科学技術が一番高いレベルに到達をしていたということなんだろうというふうに思います。こういう唐が、どうであったかよくわかりません。現存する朝鮮半島の塔としては、これが唯一です。法住寺八相殿といいまんですけども、日本で言うと江戸初期。文禄・慶長の役の際に焼失をして、その後まもなく再建されたということで、非常にすそ広がりと言いましょか、逡減率の強いという特徴があります。これを、中の、心柱の周りを四天柱のところ、イタナカイ(?) をしているという状態です。上はどうやって積み上げているかという、結構心柱だけじゃなくて、ほかの柱も高く伸ばして、場合によっては、こういう水平材の梁の真ん中辺に柱を立ててというようなことで、日本の伝統的な塔の積み上げ方とはどうも異なるらしいということがわかるわけです。これが心柱。それから四天柱、ここまでいってる。その外側の柱、ここまで。で、この辺の柱は梁の途中に乗せる。結果として、こういう五重塔というものになっています。じゃあ、韓国の塔がこれだけだったら、日本と違うねということになるわけですけども、実はもう一つ一旦焼けてしまったんですけど、これ、1980年、最近焼けた塔なんですけども、これ再建されました。この塔が、興味深いのは、こういう斜めの垂木という材料の上に、盤を置いて上の柱を乗せるというようなところが、日本の塔の造り方と非常に似てるわけです。あるいはこの天井裏で、心柱を下に伸ばさず、天井裏で心柱を止めてしまうというような日本でものちに、平安末ぐらいから、三重塔が出てきますけども、こういった造り方がここでも見られるというようなところが興味深い。この場合、この心柱をどうやって支えてるかという、こういう水平材をこの心柱に差し込んで、上からつってるような構造なわけです。最後の本山寺まで覚えておいてください。それから、中国のほうの話をしたときと思いますけれども、これ、中国でも全然実は古い塔が残ってなくて、かつての塔はどうだったんだろうということになるわけですが、北魏の5世紀、これは日本の法隆寺に伝わってる細部の様式がこの北魏の雲崗石窟でも見られるということの貴重な遺跡なわけです。法隆寺の様式を考える源流という、に、相当する場所なんですけれども。その石窟の中に、こういうものが刻まれています。中央に掘り残したところに、塔のようなものがあります。ここでは注目すべきは、中国で八角の塔と四角の塔が両方混在しています。ここでは四角の塔であるということ。それから、仏像がいて、それが各重にいるということなんです。日本の塔では、まず初重にいらっしやるのがあっても、上のほうは先ほど申し上げたように、中は、コヤグラ(?) のような存在ですので、こういうことはまずないわけですけども、どうも中国では上層までそういう部屋があって、仏像が安置されるというようなスタイルだったのではないかというふうに思われるわけ

です。龍門石窟というところでも、こういった日本の塔と似たようなスタイルの塔が、かつて中国にも木造で造られていたんだらうということをおうかがわせるものです。ここにも仏様がいらっしゃる。

(問)

清水

もうちょっと時代が下りますけども、中国では現存する、まだ10世紀ぐらいですと、まだ古い木造の塔がありません。ということで、石造の塔が残っていますので、こういうものから木造の塔がどうであったかを、逆に想像するっていうようなことになります。これだと八角の塔で、こういったところに組物がちゃんと作り出されています。石造とは思えないほど、緻密に作られています。中国で現存する最も古い木塔としては、このブツグジ(?) 釈迦塔があります。これ、高さが70メートル弱です。ダイカ(?) が、1、2、3、4、5、何重っていうときは、屋根の数を数えてるんです、何重の塔っていうの。一番下のところは、これは裳階(もこし) といいますけど、ここの本体の部分、さしかけ屋根のようにつけた部分ですので、これを数えないで五重塔ということになります。中はというと、ここに、こういう天井が張られています。ここも今、天井がなくなっているようですが、こういう天井が作られているというようなことになります。基本的にはここまでの部分、それからここからここ、コヤグラ(?) みたいな部分があります。また部屋があって、コヤグラ(?) があって、部屋があってコヤグラ(?) があってということで、一見五重塔なんですけど、実は9階建てなんです、間の部分を入れていくと。上っていきけるような構造になっていて、各重に仏様がいらっしゃるというような構造です。なので、構造的にはこういったところで、各階ごとに平坦な面といいましょうか、造って積み上げていくというようなことになります。こういう八角の塔が数多く造られています。日本では八角の塔ってあったんだらうかということをおし上げますと、基本的には四角い平面の塔なんですけれども、奈良時代、西大寺という平城京の中に西大寺というお寺が造られます。四角い塔がかつて建てたわけですが、今、四角い基壇、基礎の部分ですね。部分が、現地に残っています。それを発掘調査した際に、その四角い基壇を造る前の段階で、八角の塔を建てようとしていた痕跡が見つかっています。実際に建物は造られなかったようなんですけど。それから法勝寺、これは平安時代、白河天皇が平安京の外、白河の地で院政を始めますが、その白河に最初に造られた法勝寺というところの塔の跡が見つかっています。これが一辺の基壇の幅、こっからここまでと思ってください。これ、模型ですけども、これが大体30メートル。1辺30メートルの八角形の塔で、これは記録でも書かれていまして、これが高さが81メートル、81というか、記録上は27畳というふうに書かれています。81メートル。現在の動物園のあたりです。それから、これは鎌倉後期、信州では最初の禅寺なわけですけども、唯一現存する八角の塔というようなことがあります。なので、日本にも八角の塔というものは建てられはしたんですけども、極めてまれなものであったということになります。

(問)

清水

座らせていただくと、これから日本の塔を例にお話をしていきたいと思いますが、構造的なお話を少しさせていただきたいので、***かもしれません、ご安心いただきたいと思います。ま

ずここに、ケンセイ（？）以前の五重塔が10基ほど残っています。そのほか、小規模な塔を造るための10分の1模型のようなものも三つ残っておりますけども、基本的には本格的なものとしては、10基。室生寺の塔が一番小さい塔で、高さ16メートル。それから海住山寺、17.7メートルとありますけども、それが小さい。ほかはというと、大体30メートル級、16メートル級の2倍。32メートル前後です。それからその3倍、48メートル前後、これが興福寺の五重塔、50メートル。大体高さ的には大中小、3タイプがどうもあったらしいということがわかるわけです。これ、法隆寺の五重塔に戻りますけども、中はというと、心柱を囲うように、こういう塑像が。この塑像はこの塔ができて、しばらくして、奈良時代の初めぐらいにはこれが造られていたということになります。ここで見ると、柱、四天柱と側柱、同じ高さです。そこに水平の材料を通して、これ、皆さん、図面を見慣れない方にはわかりにくいかと思いますが、井桁状にこれが走ってると思ってください。前後には、ここです。この部分。なので、この心柱には、他の部材は全くふれることなく一番上まで。ここの部分で心柱にふれますけど、ほかは一切、この心柱に他の材料が当たることはないわけです。この図面上、こういったところに心柱にふれてる材料があるように見えますが、これはのちの補強です。基本的には一番下と上の部分だけの2点で心柱にさわってる程度だと思ってください。平坦な、ここで井桁を作って、井桁の上に束を立てて、また井桁を作って、上の柱を立てるという構造です。それから側柱、周囲の柱はというと、ここです。***の上に盤を置いて、その上に柱を。これの繰り返しです。これが先ほど裳階と言った、外側のかけびさしのようなものです。

(間)

清水

だんだん構造的に進歩していくわけですけども、この醍醐寺の五重塔、951年。この平安時代にはほぼ古代以来の大陸から伝えられてきたであろう技術を、日本的な工夫を加えて完成をさせていくということで、古代の塔の完成形といってもいいかもしれません。醍醐寺ですので、醍醐天皇を弔うために造られたというものでございます。これが高さが38メートルです。ちなみに高さと言ってるのは、この初重の礎石、石の上限からここまでを塔の高さというふうに言っています。そこを見ると、同じここに初重の柱、側柱と四天柱があって、それを***組物に乗せて、水平材で。渡して、ここで井桁を作るんですね。で、上層の柱は、ここに盤を置いて、ここに柱を立てる。醍醐寺の場合は、この下に別途束を入れて、多少補強的なものが入ってる場所ありますけど、そんなに構造的には、この作り方は変わらないわけです。塔の場合、一番何が問題になるかという、こういう水平材がたくさんあると、木材というのは、年輪に対してこういう樹木だとすると、こっからの圧縮にはあまりへこまないです。ところが、こっからの圧縮にはへこんでしまうということで、ここに水平材が多いということは、そこでだんだん沈んでいくわけです。ところが、ここに心柱1本だけあると、心柱が長年の間に突き抜けて、周りだけが沈んでいくという現象が起こるわけです。これが塔を造る大工さんにとっては、最大の課題なわけです。この場合は、この四天柱と側柱で見えていくと、両方の上に乗っかっていくいろんな部材の水平材の数といいまじょうか、そんなに変わらない。これとここは、ほぼ均等に沈んでいくと。心柱だけがだんだん、最後この辺で突き出てしまう。周りが沈む、こんな構造なわけです。これ、海住

山寺、鎌倉時代、比較的、小ぶりの塔ではありますけれども、これ高さが17メートルということになります。三重塔では、平安末ぐらいから、この心柱を省略をしようというものが現れてきます。兵庫の一乗寺三重塔とか、京都の浄瑠璃寺三重塔なんですが、五重塔ではなかなか遅くなるんです。ここ、心柱を上で止めちゃうっていうのは。小さな塔のほうが、こういう試みをするのは小さな塔からスタート、始まったと考えていいと思います。ここの場合は、ここで心柱を止めてしまう。その理由は塔の役割の変化。先ほど、お寺の中心的な信仰の中心たる存在であったものが、むしろ、伽藍(?)***、あるいは仏教を広く伝えるというような、そういう象徴としての役割に変わっていく中で、ここに祀られるものとして、舍利というよりはここに仏様が祀られる。そのためには、この心柱がじゃまになってくるということになるろうかと思えます。ここはどちらかというとお厨子のような、ここ、四天柱の中、全体がお厨子のような構造になっています。あと小さな塔のためなんでしょうか。こういったところが、柱盤という柱を乗せる井桁状の盤がなくて、四隅から伸びてくる。隅木という材料の上に直角材が乗るといようなところも、小規模なればゆえの簡略な作り方ということになります。明王院五重塔、これは30メートル級の五重塔で心柱が上から立つ、この上からですね。立ち上がるというような例です。これはこういう塔の美しさっていうの、どこで見るかって、それぞれ個人の好みもありましょうし、時代的な好みもあるでしょうけども、ある意味、人気の塔でして、戦後の本格的な木造の五重塔としては、志度寺の五重塔の話が出るわけです、昭和50年。志度寺なんかはこの明王院にならって、大体デザイン的には造られているものです。その中の様子を見ると、ここに大きな材料渡してる。ここで心柱置ける。四天柱と側柱の上の条件はそんなに変わりませんので、これも、この心柱以外の部分は均等に沈下してるというようなことになります。この辺はのちの改造があるので、よくわからないとこです。それから、興福寺の五重塔です。これもそんなに変わっていません。大きな塔の場合は、ここの上で止めるのがためられるといいましょか、ということで、心柱を下まで伸ばすということになりました。ここでは変わっていませんと言いましたが、新しい傾向としては、ここに軒先が垂れ下がらないように、組物を積み重ねて、ここに尾垂木というもので受けるわけですが、新たにここにこういう材料です。ここで言うと、こういう材料。そういうものでこの部分が、丸桁(がぎょう)と言いますが、これが外に開かないようにっていうようなことをやっています。

(間)

清水

以上を見ると、中世を通じて三重塔では実は結構新しい試み、心柱を天井上で止めるものが増えていくわけですが、五重塔の場合は、まだまだ保守的と言いましょか、あんまり大胆な試みはまだためらっていたというような感じがいたします。近世に入ると、教王護国寺の五重塔というのがありますけれども、これ、実は仏舎利をここに納めているということが知られています。ほかの塔で仏舎利がどこに、どうなってしまったのかよくわからないものですけども、昔、地中、深くに心柱の下にあった仏舎利というものが、ここにまで行っている。高いところにあるわけです。なので、そういう意味で言うと、まだ舍利信仰というものが、だんだん仏様が信仰の対象になっていく中で、舍利信仰を伝えるというような性格を塔は持ち続けていたのかもしれないとい

うこととなります。最初の話に戻りますけども、飛鳥寺が日本で最初に造られた塔で、その塔の心礎の部分、地中深くに舍利を納めていた。これは事実として学問的には確認されているわけです。ところがそれ以前、『日本書紀』の記録によると、大野の丘の北側に蘇我馬子が塔を建てるんです。まだ確認できてないので、何とも言えませんが、『日本書紀』の記録によると、塔ってというか、塔の柱を立てた。塔の形をしてたかもわからない。柱だけかもしれない。それが舍利を、柱の頂部に舍利を納めたって書いてあるんです。なので、その辺はまだ古代史はわからないところも。最初から、こういう柱1本だけあって、上に納めてるといようなことです。なので、まだその辺がわからないことも、いまだに多いわけです。この教王護国寺、これ、東寺です。東寺のことですが、この五重塔は現存する中では一番高い塔なわけですけども、実は1643年に竣工した。それから、半世紀後に心柱の足元を1尺5寸切り縮めたという。足元を切り縮めたというのは、記録でわかります。それがどのくらい切り縮めたかっていうのは、この中の彩色、文様とのずれですね。周りの文様等とここのずれから見ると大体1尺5寸だったというふうに想定されています。つまり、高さが55メートルほどの塔で造ってから50年後に1尺5寸周りが下がっちゃった。それに合わせて、この心柱の足元を切り縮めなければならなかった、こういうこととなります。構造的にはどうかというと、心柱があります。それから四天柱。これ、だいぶ実は構造、今までの塔はこの辺で柱盤を渡して、そこに上の柱が立ってたんですけども、ここではこの柱をずっと下のほうまで伸ばして、この間短くなってるわけです。なので、心柱と四天柱との沈下具合の差ってというのは、どちらかというと改善されてるはずなんです。こっちはまだ水平材がいっぱいありますので、さらに沈下する可能性が高いんですけど、こっちは相当改善されている。そういう中で、これを1尺5寸切り縮めなければならなかったと言ってるわけです。これは日光東照宮です。江戸時代の終わりに近い江戸後期ですけども。これ、高さ36メートルということになります。この塔を貫いてる心柱がありますが、上のほうではこの心柱を、ここに鎖があって、つるしています。下はというと、この礎石の上には乗らずに、つり下げてるわけです。ここに多少の隙間を設けて、ちなみにここによくわからないもの、これは竹を巻きつけたものでして、心柱がゆらゆら揺れたときに、その竹がばねの役割を果たして、周りの材と、緩衝材のようなものです。そういったこととなります。構造的にはこの柱盤という、挟んで、下の柱と上の柱がもうすぐここにごちゃごちゃといろんなものが入らずに、力を伝えているわけです。なので、京都の教王護国寺に比べると、ここの沈下の問題については、ほぼ改善されたと言っていいかもしれません。それから、側柱もこの柱盤を今度はそのまま外に伸ばして、ここに出す。組物はどうしても使わないわけにいきませんので、ここだけは問題が残るものの、相当沈下の問題に対しては改善されるわけです。ただ、今度逆にこういう盤がここに通ると、ここに尾垂木という斜めの材があるわけですけども、この材です。尾垂木。こっちは盤を伸ばしたがゆえに、今度はこの尾垂木が、こう伸ばせなくなった。ここで止めざるを得なくなるという問題が起きてくるわけです。なので、これは尾垂木は構造材として伸びてたものが、お化粧、周りを飾るためのものに退化するということとなります。それからこの柱盤自体が、柱を受けるだけじゃなくて、この先までさらに伸ばして、この丸桁を受けるという役割も担うようになってくるというところが大きな改善点であっ

たわけです。備中国分寺です。塔に限らず、江戸時代の終わり頃になってくると、ケヤキの材料を使うようになります。ケヤキっていうのはどういう特徴があるかということ、非常に上からの圧縮に強い。粘りはないんですけど、圧縮に強いということがあって、奈良時代でも、基本的、奈良時代の木造像建築といえば、ヒノキで造ってるのは当たり前なんですけども、例えば当麻寺の三重塔のような奈良時代ですけども、それでも四隅の一番、四隅のこういったとこです。柱の上の、この屋根の荷重が一番ここに集中する。この一番めり込みやすいこの材料だけはケヤキを使うというようなことで、材料の使い分けをしてたわけですが。近世になると、今度は建物に極彩色の色を塗るというのではなくて、木目の美しさそのものを見せるというような建物の表現の仕方が出てきて、その中で特にケヤキの木目の美しさということを書いて、塗装はせずにケヤキをたくさん使う。建物全部をケヤキで造ると、総ケヤキ造りっていうんですけど、それは大変なことなんです。固くて、加工しにくい材料。しかも、一旦組んだものはずすと、またねじれができて、二度と組み立てられないみたいな、非常に扱いにくい材料なんですけど、そういう扱いにくい材料を使って造ると、総ケヤキ造りと言ってほめ言葉になるわけです。この備中国分寺の五重塔は三重まではケヤキを使って、四重以上が松とか使ってるということになります。この塔を文政4年頃工事着手。天保6年***、弘化元年頃完成するというふうに書いてある。20年余りなわけですけども、これを塩飽(しわく)諸島、本島の生の浜という西側のほうの浜ですけども、そこの番匠屋という屋号の大工さん、橋家が3代かかっているんです。この最初のヘイハチさんは工事着手頃には既に亡くなっていて、実質この次のワヘイさん、2代目。その方も完成を見ることなく亡くなって、この貫五郎さんが最後まで面倒を見るという、こういうことであります。この塔は、ほかの塔ではまずないんですけども、今までここに柱盤という加工した角材使ったようなところ、丸太を使ってるわけです。こういう丸太を使って、丸太ですので、曲がりくねったような癖のあるというような材料を使いながら工夫して収めているというものなわけですけども。一応柱盤に相当するような梁がずっと伸びてきています。それから梁を継ぎ足してといていましょうか、ここに伸びています。この梁は、ここに力をかけないように、かきこんで(?)、ここに力が当たらないようにして、これを受けてるわけです。あとはこういう盤の上に、こういう柱を乗せる。あるいは、こういった組物の材料を内に伸ばして、柱に差し込むというようなことをやっています。ここに実は床があるんです。各重に床を使ってというようなところも新しい要素で、ここに差し込んでるところが新しいことになります。あと、相輪がほかと変わっているんで、ご紹介しておきますと、通常心柱が、こう、立ってて、その上に相輪が上から一つずつパーツを収めてるわけです。こういう筒状のものを入れて、その次にこういうものを乗せて、また筒を乗せて、また、こう。上からどんどん落とし込んでいく。心柱が下がったら、一緒になって下がっていく、そういう関係なんです。ところがここでは、この塔頂の筒がなくて、この九輪という相輪です。これを九つだけ。これを心柱に直接釘で打ちつけてるというやり方。ここはそこに銅板を巻くみたいな感じなんです。心柱とともに、上はそのまま下がっていくようなものなわけなんです。今、解体修理の際にそこはあまりにも何だぞということで、今は普通の仕様に改めてしまってますけど、当初はそういう。善通寺になるわけですけども、先ほどの貫五郎さんがここ

にやってくるわけです。なので、普通に考えれば、親子三代で、この塔の建設に着手して、最後まで面倒を見た人がここでの経験を踏まえて、善通寺に取り組んだのではないかということが想像されるわけです。

(問)

清水 善通寺ですけれども、

(問)

清水 ここ2段にわたって、二重丸(?)と三重***。それから相輪部分だけはまた別のことで、時間がかかっています。特に五重までできてから相輪まで、ここで結構時間かかっているんです。これは京都のほうでしたっけ。に、発注をして取り寄せるわけですが、そこで時間がかかっているということです。ここでもケヤキを、下のほうではケヤキをたくさん使って、上のほうは松が増えてくるというようなことであります。なので、ケヤキを使うというようなことです。どれだっけ。

(問)

清水 内部はというと、心柱をずっと鎖でつるしています。これが心柱の下です。ここに心礎があって、心柱の下、ここにほぞがあって、ほぞの部分がここに、若干入っているというような感じです。なので、心柱が上からつってるとはいつても、振り子のようにぶらぶらしてるわけではない。その状況というのは、日光でも同じです。つまり、これはいずれ、だんだん沈下をしていくと、すぼっと収まって、この上に乗っかるかもしれないというような感じかなというふうに思っています。ここで思い出すのは、薬師寺の西塔を再建をしたとき。何だっけ。棟梁の何とかさん、名前が出てこない。何だっけ。実は大論争が起こるわけです。当時西岡棟梁だ。西岡棟梁がこの薬師寺西塔を建てるわけですが、そこに学者グループの太田博太郎という大先生を筆頭に、学者先生方がいる。棟梁を筆頭に西岡大棟梁がいて、大論争をやるわけです。この心柱、どうせまた周り沈下してくる、どうしようという話の中で、太田先生をはじめとする先生方は心礎の上に直接心柱は立てるべきだというふうに。だけど、西岡棟梁としては、それじゃ困る。最後に落ち着いたところが、下に、じゃあ、くさびでも入れておこうか。だんだん下がってきたら、くさびを埋めていこうみたいな、そんなことで落ち着いた。中を取ったといいましょうか、というような話を聞いていますが。なので、どのくらい沈下するかっていうの、なかなか読みにくいところではありますけれども、考え方としてはそういう、いずれ沈下をして、最後は下に当たって落ち着くというようなことを考えていたのではないかなという気がいたしております。これが柱盤と呼ばれるものです。これが心柱、これが四天柱です。その柱盤がさらに外に伸ばして、ここに側柱が立つという構造ですので、日光東照宮の構造にほぼ近いわけです。これが外ですけども、組物のこういう肘木がこうありますが、水平材。そういうものが中に伸びてくると、間の隙間がなしで、柱にささってる。それから尾垂木2本ありますけれども、そのうちの一方だけがちょっと後ろを伸ばして、ここに当たっているということです。もともとはこういう材料がなくて、この尾垂木がずっと伸びて、尾垂木が支える構造だったのが、主役がこっちへ移って、こっちが飾り的なものにだんだん変わってきてる。そういう意味で言うと、近世の傾向をそのまま示している構造だということになります。

(問)

清水　これが心柱。で、四天柱。もう間に柱盤以外の材料がなくて、上下の柱が直接力を伝え合っていくことがわかります。それから、こういう尾垂木が奥に伸びるのではなくて、この辺は先ほどの写真、ここです。伸びてるのがあります。それから柱盤がずっと側柱も受けて、さらに丸桁（がんぎょう）と呼ばれるところを受けてるというような構造になっています。

(問)

清水　先ほど、備中国分寺で床を張っているということを申しましたが、善通寺五重塔でも、ここに床を張ってる。上にも上がれるようになっているという点では、備中国分寺の経験がそのまま出てきてるんだと思います。それから本山寺の五重塔ですけれども、明治29年に着手して、43年に五重ができてる。それから相輪を作るまで、やっぱり時間がかかってます。この心柱に書いてある墨書から言うと大工さんとしてはヒラノさんという方とタダさんという方がいて、タダさんというのは地元大工の代表というような位置づけだと思いますが、このヒラノさんという人はどういう人かということ、この人は小豆島の出身ということのようです。だから、先ほど、塩飽大工なんていう話と、小豆島大工なんていう話、小豆島大工と塩飽大工、どのくらい近いのか私もよくわかってませんが、そういう島大工が腕をふるっていたということがわかるわけです。中の、ここの様子、床を張ってる様子がよくわかります。これは初重の様子です。初重、側柱と、ここに四天柱があるんです。ここは、初重のここ、側柱は外に組物を見せますので、その一部がここに見えてくるのは普通なんですけども、四天柱のここに組物を使う、見えるっていうのはないんです。つまり、もともとここに四天柱の側柱と同じ高さで、ここに組物を積み上げるというやり方は、平安時代の醍醐寺の五重塔ぐらいまでなんです。そのあとここの組物は省略をしてしまう。この中の柱が上へ伸ばして、だんだん高く伸ばすようになって、ここには組物を使わないんですが、ここの場合はここに柱に組物を差して、組物を見せるという、見せる意識といいましょうか。お堂の中を仏堂と同じように組物を組んでみせるというところがちょっと今までとは違うかなというふうに思っています。ここですね。こういったところに組物がある。醍醐寺の五重塔ぐらい以降は基本的に見られないものです。あと特徴としては、ここの心柱の下に重量箱という箱があって、その中にこぶし大よりもちょっと小さめかな。そのくらいの川原石に経文を書いた経石というものを、その箱の中に***しています。重量箱という名前が残っていますので、そういう重りという意識で、ここにつり下げたものと思われま。これも、今、修理工事中ですので、最終的にまた詳しい報告書が出されると思いますけども、当初はこれ、浮いてたんでしょうか。仮に浮いていたとしても、いずれは接着といいましょうか、いつかそうなるだろうぐらいは想定をして浮かせていたんじゃないのかなという気がします。それから、ここで組物が内部に組物を据えていましたが(?)、外側の組物の見せ方を見ると、ここに尾垂木というのは2本。ちょっと待ってください。これ、善通寺ですけども、ここに尾垂木が2本あります。これは伝統的なスタイルというよりは、どちらかというと、禅宗様といいましょうか。それから、こういうところに装飾化していくようなところも古代以来の和様といいますけども、古代以来の伝統では、これ1本しかないはずなんですけど、こういったところに2本入れて装飾的なものにしていくという

あたりですね。それもこの善通寺と本山寺との共通点なんだろうなというふうに思います。これ、本山寺の内部ですけども、心柱、今度は鎖ではなくて、こういう水平の材を差して、そっからつっているようなものです。ここでかなりだいぶ前のお話になりますけども、朝鮮半島で三重塔で据わってる心柱を上からつるしてるというお話をしましたけども、それに似たような構造なわけです。これは本山寺の、非常に組物が、ある意味構造からは、ときはなれて、外にべたべた貼りつけるような感じで装飾。装飾化することで逆に言うと、一つ一つの部材がきゃしゃなものになっていくということも生まれるわけですけども。それから、層によっては、そういう装飾がしてない状態。これ、2本尾垂木がありますが、こういう上がちょっとそったようなと言いましょか。ここに山型ができる。こういう禅宗様のスタイルの尾垂木なわけですが。それで、この間の材料をたくさん組み合わせています。こんな感じです。これは柱盤の部分です。四天柱がここに乗って、その外に側柱が立ってる。この柱盤の先をさらに伸ばして、丸桁を受ける。そういう意味では、善通寺と同じような構造にしています。ただし、柱盤の盤面が足りなかったというのでしょうか。ちょっと垂れ下がって、曲がったり、下がってしまうということで、その結果、外側、一番外の列が下へ下がってしまうようなことが起こっています。一通り本山寺まで来たわけですけども、こうやってプロポーシオンを比較してみようと思います。これ、高さの違うものを、高さをほぼそろえて並べてみたところです。

(間)

清水

先ほど備中国分寺、非常に相輪が短いというところが特徴があります。そこでかかわった貫五郎さんが善通寺に来て、また塔の建築に挑戦をするわけですが、そのときに相輪をより古式なものにしたいというふうに思ったんでしょうね。それから基壇周りを見ると、古代には大体基壇を築いた上に、要するに土間の床の上に建物を建てるということをやりますが、だんだん中世以降こういう板床を張った建て方が出てくるわけですけども、むしろこっちが主流になっていく中で、土間床、古式な塔を造ろうとしたんだということは考えます。土間床といっても、中は低い転ばし根太という非常に低い床を張ってるわけですね。基本的にはそういう基壇の上に直接建物を建てるというようなものです。一方、本山寺の場合は床張りの建物として造っていく。こっちのほうが、ここの部分について言うと時代相互(?)という感じではあります。最後になりますけども、プロポーシオン、教王護国寺と善通寺、土間床の建物。ともに日本の1番と2番の高さを誇るわけですので、当然東寺の塔は見ているでしょう。おおむねプロポーシオン的には近い。ただ、軒の出が短いので、ちょっと軒を伸ばしていくと、ほぼ似たようなものになるかなと。それから日光東照宮と本山寺。これはよりスリムな、こちらと比べるとよりスリムな感じで、よく似たバランスですけども、本山寺の場合、このあたりから上の層の高さが、この高さがそんなに減っていかないんです。初重は同じぐらいなんです。この辺はむしろ高いぐらいです。だから、そこが、この中に床を張っている、堂内空間というものの意識、反映してるのかなというふうに思っています。これ、最後になりますけども、非常に難しい話をして申し訳なかったんですが、改めて振り返ってみたいと思います。醍醐寺の塔、これ、柱です、同じ高さ。それから盤を乗せて柱を立てる。盤を乗せて柱を立てる。それをずっと見ていくと、東寺の五重塔ではこの中の四

天柱、ここですね。この柱の下のほうまでぐっと伸びていきます。外は変わりません。日光東照宮ですと、中の四天柱、これが下まで伸びただけじゃなくて、今度、上のほうまで伸びてる。ほぼつながったと言いましょか。間に水平材としては柱盤があるだけ。側柱も同じように今度はこれが伸びてるわけです。下に伸びている。最後に残るのは組物だけは、ここだけはどうしても解決がつかないわけです。どうしてもそこで沈下具合に差が出てしまうということになります。基本的には五重塔にしても三重塔にしても、組物だけは、三手先という、一つ、二つ、三つと軒先を受けるように外へ出していくわけです。こういうのを三手先組物といいます。これ、奈良時代だと重要な仏堂では必ず三手先を使うわけです。ところが仏堂では、もう平安時代ぐらいからほとんど三手先使うことがなくなるんです。ところが五重塔に関していうと、営々として、各時代を通じて三手先を固守していくわけです。これがそれだけ塔というのは非常に格式を見せる建物ということで、いろんな課題を乗り越えようとしつつも、この三手先組物だけは捨てることができなかつた。ここに構造的にはややこしい問題がずっと引きずっているというようなことになるわけです。かいつまんで言うと、普通寺というのはプロポーション、あるいは、など(?)、あるいは床では古式ですけども、構造は日光に近似した近世的なスタイルを踏襲をしている。それから本山寺について言うと、非常にきゃしゃな建築であるということはおわかりになると思います。この図。これはプロポーションを拡大したりして比較してるわけですけども、非常にきゃしゃな建築であるというようなことです。古代の木柄の太い建築というものから、近世にかけてずっと木柄をスリム化していくという大きな流れがあるわけですけども、そういう延長の中で、そういう木柄の細い構造でもたせるということをだんだんやっていくわけです。なので、普通寺がある意味、古式な木柄の太い要素を持ってる」とすると、本山寺ではそういうプロポーション的なものでは近世的なものを引きずっているというようなことが言えるのではないかと思います。非常に構造の話をお伝えするのは、私自身もなかなか苦しいのですけれども、皆さんもちょっと難しかったのではないかと心配はしております。時間も過ぎてしまいましたけれども、これでお話を終わりたいと思います。どうも、ありがとうございました。

(ご指定箇所終了 01:43:15)